

招待席

## 川上 眉山

かわかみ びざん 小説家 1869.3.5 - 1908.6.15 大阪府に生まれる。紅葉、美妙を知り硯友社に入り、反俗の思いから社会を批判しいわゆる「観念小説」を書いて泉鏡花らとともに世に迎えられた。樋口一葉にも関心をもたれたが、文学の迷い深く、生活苦も加わり自殺。自然主義と反自然主義のせめぎあおうとする思潮の中で孤独に佇んだような作者であった。掲載作は明治三十九年(1906)「早稲田文学」二月号に初出、島崎藤村「破戒」出版の前月であった。

## ゆふだすき

—

いや、驚いたよ君、何ものぼぼんで歩いて居た訳ぢやなかつたが、不意に横ツ手から、

「あら、まア、梅原さんぢやアありませんの。」

と甲(かん)の高い、調子の走ツた、化生(けしやう)の者の叫び声だ。何者と振返ツて見ると、銀鼠(ぎんねず)の頭巾(づきん)を深く黒のコートに羽衣ショール、犇(ひし)と鎧(よろ)ツて居るのだから、正味は解らなかつたが、しやなりとした姿から最(も)う、只者ではない。見たやうだが、思出せないで居ると、向うは馴れ馴れしく、

「まア、お珍しいぢやアありませんか。」

と近く、ぱツちりとした涼しい眼でぢツと見る。此方(こちら)は少からず狼狽(まごつ)いた形、変な調子で、

「失礼だが誰方だツたか……。」

「あら、お忘れなすツたの。実(じつ)が無いのねえ。私は彼(あ)の下谷(したや)の若狭屋(わかさや)に居ました時分……。」

「むゝ、今ちやんか。」

「おほゝゝゝ、昔の名を仰有(おツしや)ると恥かしょうござんすわ。」

「や、然(さ)うだツたかい。様子が変わつて了ツたから、すツかり見違へたよ。」

畜(たゞ)に様子ばかりぢやない、何から何まで変ツて了ツたのだが、見違へる方が至当(もつとも)だ。僕がそれや、彼(あ)の時には君にも苦い異見を喰ツたが、お笑ひ草さ、例の小房(こふさ)ね、彼女(あれ)と一つ家(うち)に抱妓(かゝへ)で居た、其時分は小今(こいま)と言ツた女だ。

古い談話(はなし)で、何しろ最(も)う一昔前、今ぢや夢さへも見た事がない。跡形もなく忘れて居たのが不意に這麼(こんな)出幕(でまく)になツたので、何だか妙な心持になツたが、併(しか)し慥(か)う廻遇(めぐりあ)ツた処で、何(だ)うの慥(か)うのといふ仲ぢやないのだから、其儘別れる気で、当座の挨拶をして居ると、

「矢張(やつぱ)し気が差したんですね。今日は朝ツから、何だか嬉しい事が有るやうな心持がしてならなかつたんですが、此処處で突如(だしぬけ)にお目に掛られようとは思ひもませんでしたわ。本当に何年振でせう。でも思ひは届くものですねえ。」

と慥(か)うだ。妙な事を言ふとは思ツたが、寄らず障らず、  
「いや全く此処で遇(あ)はうとは思掛けなかつたよ。不思議な処で珍しい人に遇ツたもんだね。」

と言ツて、別に人目もなかつたから、  
「今ぢや何処の奥様(おくさん)だね。」  
と態(わざ)と言ツた。すると訳もなく笑出して、  
「おほゝゝゝ、這麼(こんな)で奥様に見えますかね。生憎と未だ独り者よ。」  
「はて、何(だ)う間違ツたのだ。其様子で独り者なぞとは、勿体なさ過ぎて本當にされないぢやないか。」

「まア、いゝやうな事を仰有ること、それはね、相手は降るほど有りは有りま  
すけれどもね……。」

「ふむ、余(あんま)りお高いんで……。」  
「とでもして置ませうか。未だ御存じない中(うち)は、何とでも言ツて置  
ますからね。おほゝゝゝ。まア、それはそれとして、あの不意に這麼(こんな)  
事を言ふのも何ですけれど、実は貴方には、種々(いろいろ)とお談話(はなし)  
もしお願いもしたい事が前から有るのですが、何うでせう御迷惑でも一寸、宅  
へお寄りなすツて下さる訳には参りますまいか。あの、つい此先なんです。」

「え、家へ。」  
と何だか様子が知れぬから、流石(さすが)に少し躊躇した。それと見て取ツ  
たか直ぐに、

「なに些少(ちつと)もお心遣ひの要るやうな家ぢやありませんの。外(ほか)に  
お差合ひも何(なん)にもありません。貴方、本當に後生ですが……。」

「だが私に何の用だね。」

「まア、那樣(そんな)事を仰有らないで、お馴染甲斐(がひ)に一寸(ちよつと)ねえ、あら、何を考へていらツしやるの。」

「なにそりや、幸ひ用もないんだから、寄るには寄ツても可(い)いがね……。」

と少しは好奇心を先に立ツた。相手は舌を置かせず、

「まア、有難い事。本当に、這麼(こんな)嬉しい事はありませんわ。何しろ路中(みちなか)でお談話(はなし)も出来ません。それぢや御案内を致しませう。さア入らしツて下さいまし。」

といそいそ先に立つ。何だか訳が解らない。少々魅(つま)まれの姿ぢやあツたが、丁度身體(からだ)は明いて居たし、内々面白づくが手伝ツて、何も談話(はなし)の種位の氣で、一処に出掛けたと思ひたまへ。何でも五六町、只有(とあ)る新開(しんかい)へ入ツて、二度ばかり曲ツたと思ふと、未だ真新らしい門構への、庭に小広く、手の入ツた植込を越して、奥に氣の利いた二階家が見える。其処だ。表の標札に大川いま。

見た処で慥(か)ういふ向きの住居(すまひ)とは思はれぬ。それも案外だ。さては被囿(かこはれ)だな、と早合点に見渡した途端、

「此処でございますよ。本当に汚穢(むさくる)しい処で。」

「や、恐入ツた。大方這麼(こんな)始末だらうとは思ツたが、大分いゝ者を捉まへて居るね。」

「あら那樣(そんな)のぢやアないのですよ。これでも今度、自分で買ツて入ツたのですよ。」

「ふむ、自分で、と言ふと？」

「おほゝゝ。まア、お話申しますからお入りなすツて。」

潜門(くゞり)を開けると、花崗(みかげ)の短冊石(たんざくいし)に、左右を敷松葉、掃除が届いて、塵一つない。ばらばらと出迎へに来た十三ばかりの小婢(こをんな)と、三十一二の見苦しからぬ女中、

「お帰りなさいまし。」

続いて、

「お帰りなさいまし。」

此方(こなた)は心易げに、軽く、

「はい只今。あの、お客様をお連(つれ)申したよ。」

と振返ツて僕に、

「さア、何うぞ此方(こちら)へ。」

少々処か、いよいよ魅(つま)されの姿になツて来た。玄関、中の間、座敷の模様全く不相応な普請の態(さま)に、猶更不思議立ツて兎(と)もあれ導かれるまゝに座に着くと、やがて上の物を脱捨てゝ来たお今は、座敷へ入るから既(はや)走込(かけこ)むやうにして、

「本当に能く入らしツて下すツた事。いゝえねえ、這麼(こんな)時がどうかしたら来る事があるだらうかと当(あて)にしないやうにしてもつい当にして居たのですが、恁(か)うして思掛けなく来て戴かれる事にならうとは、全く思ツて居ませんでしたの。貴方は御存じありますまいけれど、私最(も)う、這麼嬉しい事はありませんわ。」

見ると裁下(したておろ)しの黒縮緬の羽織に、深川鼠の縞御召(しまおめし)の小袖、銀杏返(いてふがへ)しに薄化粧して、年は三つ四つも若く、何処となく垢抜けのしたのに、昔の影を残しては居るが、見馴れた其頃の佻(おもかげ)とは、さながら別の人のように変ツて居る。

何(いづ)れにしても腑に落ちないので、

「併し私には何だか全(まる)で了解(のみこ)めないね。」

「おや何がえ。」

とお今は先づ微笑みながら訊く。

「何がと言ツて、何から何まで解らないづくめだ。第一まアお今さんの今の身からして全(まる)で読めないね。」

「おほゝゝ、まア何に見えませう。」

「然うさね、萬更堅気でもなしと言ツた処で此の體(てい)だらう。そりや主(ぬし)のあるには決まツちやア居るが……。」

「あら、先刻(さつき)も独り者だと言ツたぢやありませんか。」

「むゝ、然(さ)う言はれると猶の事だ。何だか野暮の事を訊くやうだが、全體今何をしてお出(いで)だね。」

「遊(あす)んで居ますのさ。御覧の通りで。」

「はてね、そして。」

「それツきりなの。何(なに)も有りはしませんわ。」

「さアいよいよ解らないね。」

「何もむつかしい事は有りはしますまい。兎に角恁(か)うして暮して居るんですもの。これでも御覧なさるよりは生帳面(きちやうめん)ですよ。そりやア泥水上りにしちや可哀想な位で。おほゝゝゝ。」

「解らない。矢張り解らない。」

「おほゝゝ、大層気になさるのねえ、居心がお悪いやうなら申しますがね、正(しやう)は最う後家さんで……。」

「むゝ、少し当りが付き出したね。」

「今ぢや元の素人(しろうと)ですの。お差障りはないのですから、其処だけは御安心なすツて下さい。おほゝゝゝ。」

「なに、然ういふ訳なら、有ツた処で仔細はない。むゝ、それぢや疾(と)うに足を洗ツて了ツたのだね。併し折角然うなツたに、余(あんま)り早い別れやう

ぢやないかね。今の若さに何といふ事だらう。様子は知らないが、お気の毒の事だね。」

「はい、まア然う仰有(おつしや)られて見れば那樣(そんな)ものですけど、なに、然うまで思合ツた仲ぢやなし、言はゞお互ひの便利で同棲(いつしよ)になツた人なんです、いゝ塩梅(あんばい)に仕事が当ツて、めきめき、儲けたのを其儘で残して逝(い)ツてくれたのですから、お蔭は、十分に受けて居ますがね、なに、亡くなる時にも、外(ほか)にくれて遣る先もないから、残らず貴様に譲ツて遣る。無理に俺ん処へ来た埋合せに、これから浮気の仕放題をしる。何(ど)うせ又、濡れ手で掴んだ泡沫錢(あぶくぜに)だ。遣(つか)へるだけ面白く遣つて見る。と恚う言ツて逝ツた位なんです。一昨年(をとゝし)ですよ。台湾熱でね、急に取られて了ツたのです。貴方、私は台湾までも流れて行ツたんですよ。此方(こつち)へ舞戻ツて来たのはつい此頃の事です。」

「それぢや其迄の間には、随分面白い芝居も打ツた事だらうね。」

「はア、そりや種々(いろいろ)の風にも吹かれましたよ。相応の苦勞もしましたわ。何しろ最(も)う十年越しですからね。」

「むゝ、訳のありたけ仕尽してかね。」

「おほゝゝ、飛んだお綱ですね、なに、気の利いた事は一つだツて有りやしませんよ。御覧なさい。未だに恚う遣(や)ツて一人ぼツちで居る位ですもの。」

「では最(も)う跡釜を探して居るといふのかね。」

「いえ最(も)う其方(そつち)は沢山ですから……。」

「当分お休みかね。」

「さア、昨日までは然うでしたがね……。」

「先は請合はれないのかい。や、油断がならない。」

「本当に御用心なさいよ。おほゝゝゝ。」

「はゝゝ、なに、此方には那樣(そんな)心配はないから安心さ。」

と這麼(こんな)事にはなツたが、全體何で此処へ招かれたのか、其方は未だ一向に解らない。僕は只旗色を見て居たのだ。

## 二

其中(そのうち)に酒が出る。肴(さかな)は並ぶ。何か手を尽した事で、一寸は帰れないやうな始末になツて来た。それにしても、何を言はれるのか、様子が更に知れないので、それとなく切ツ掛けを待ツて居ると、お今は其中(そのうち)に稍(やや)改まツた形で、

「まア、何かからお話し申ませうね。」

と少し考へて居るやうに見えたが、  
「貴方も御存じの通り、以前の商売にも不向(ふむき)な位でしたから、這麼(こんな)時に巧く訳なしに出て来ないから困るんですよ。なにね、厚顔(あつかま)しい段に掛けちやア、相応に場数も踏んで来たんですから、随分阿婆摺(あばず)れの気ぢやア居るんですけれど、何(ど)うかすると地金が出て来るもんですからねえ……。」

と何か怪しく言悪(にく)い様子で、不意に、  
「まア最(も)一つ戴きませう。」

と進んで盃を受けて、其儘衝(つ)と干した。

此方(こつち)を見て、笑ひながら、  
「何だか酷くむつかしいやうだね。」

「はア、一寸出やうがないもんですからね。」

「むゝ、全體何の事だい。」

「待ツていらつしやいよ。せかれちや猶仕様がありませんわ。おほほゝゝ、何だか生娘(きむすめ)のやうに、極りが悪いから可笑しいぢやありませんか。」

と言ツて急に投げ出したやうに、

「馬鹿々々しい、這麼(こんな)事におこつて何うなりませう。恚うして焼継(やけつぎ)だらけの身體(からだ)でもツて、那樣(そん)なお人柄な事を言はれた義理ぢやありませんね。面倒ですから最う、色を付けないで露出(むきだ)しに言ツて了ひませう。」

「むゝ、何だか口上が馬鹿に長いが、全體これから何うしようと言ふのだね。」

言ふと事もなげに、

「これから貴方を口説(くど)かうと言ふのですよ。」

「なに、口説く？」

「はア、飛んだお談話(はなし)でせう。」

「然うさね、何う間違ツたか知らないが、此方(こつち)にやとんと支度(したく)がないのだから、何とも挨拶の仕様がなね。」

「ですから取付きやうがないので、這麼(こんな)にうぢついて居るぢやありませんか。」

「第一口説かれる覚えがないからね。」

「おほゝゝゝ、でも此方に覚えがあるんですもの。仕様がありませんね。」

「はゝゝ、冗談ぢやない、調戯(からか)ひやうが些少(ちと)くど過ぎるね。」

「あれ、本当なんですよ、これでも。」

「最ういゝ加減にしないかい。馬鹿々々しくツて談話(はなし)にもならないぢやないか、いくら火移りが早いと言ツたからツて、昔は只の見知り越(ごし)、今の先不意と遇(あ)ツて、未だ、久し振の挨拶さへ切れない中に、余(あんま)

り手軽過ぎて、其方(そつち)の御了簡方(ごりやうけんかた)が積(つも)られるやうな談話(はなし)だ。まさかに那樣(さう)安(やす)つぼいのも無(な)からうと思(おも)ふが、余(あま)り盛(も)り付けられると此方(こつち)もつい言(い)ひたくならうぢやないかね。」

と笑(わ)ひに紛(ま)らしながら、少し突(つ)込んで言(い)つて見た。聞(き)くと居住居(みずまひ)ながら、何も冗(じゆん)談(だん)でないやうな風(かぜ)で、

「然(さ)うでせう、そちらぢや御(ご)存(ぞん)じない事(こと)ですから、然(さ)うお思(おも)ひなされるのも御(ご)無(な)理(り)はありませぬ。ですが貴(き)方(かた)、此(こ)事(じ)は、昨日(けふ)や今日(けふ)に始(は)まつたのぢやないのですよ。今(いま)になつて這(こ)んな事(こと)を言(い)ふと、取(と)つて付(つ)けたやうにもお思(おも)ひなされるでせう。身(み)體(たい)はさんざんに持(も)ち崩(くずれ)して了(し)つて、勝手(かたが)な時(とき)に這(こ)んな事(こと)を言(い)はれた義(ぎ)理(り)ぢやないのですけれど、可(あ)れな思(おも)ひだと思(おも)つて下(くだ)さい、これでもねえ、彼(あ)の時(とき)十六(じゅうろく)の、未(いま)だ何(なに)にも知(し)らない時(とき)分(ぶん)から、恚(いか)うして思(おも)込んで未(いま)だ忘(わ)れずに居(ゐ)るのです、折(せ)がなかつたし、縁(ゆかり)がなかつたので、打(うち)明(あ)ける間(ま)もなくつて居(ゐ)る中(うち)に、何(なに)うでせう、貴(き)方(かた)、最(も)う一(いっ)昔(せき)になつて了(し)ましたわ。」

と何(なに)か知(し)らず俯(うつむ)向(む)いた。最(も)う口(くち)先(さき)ではなくなつて來(き)たので、流(なが)石(いし)(さすが)に又(また)驚(おどろ)いたが、言(い)はれるほど猶(なほ)更(さら)に了(し)解(かい)(のみこ)めない。

「むゝ、変(へん)な、思(おも)ひも付(つ)かない事(こと)になつて來(き)たぜ。訳(わけ)は解(かい)らないが兎(う)も角(かく)承(承)らう。今(いま)も言(い)つた通り、覚(おぼ)えのない事(こと)だから、何(なに)とも御(ご)返(へん)事(じ)は出(で)来(こ)かねるがね、一(いっ)體(たい)まア何(なに)うしたといふのだい。然(さ)うまで言(い)ふからにはまさか冗(じゆん)談(だん)ではあるまいがね。」

「冗(じゆん)談(だん)處(ところ)ですか……冗(じゆん)談(だん)なら貴(き)方(かた)、もつと氣(き)の利(り)いた言(い)ひやうが有(あ)りますわね。本(ほん)当(たう)に先(さ)刻(さつき)お目(め)に掛(か)つた時(とき)は、あゝ未(いま)だ縁(ゆかり)が尽(つ)きなかつたかと、心(こゝろ)ぢやそれこそ手(て)を合(あ)はさないばつかりでした。來(き)て下(くだ)さると仰(おほ)有(あ)つた時(とき)、これをも機(しほ)に、とてもと胸(むね)に思(おも)つて居(ゐ)た事(こと)を、出(で)來(こ)るなら何(なに)うかして、と直(ただ)ぐに思(おも)ひはしましたものの、お目(め)に掛(か)つた今日(けふ)が今日(けふ)、最(も)う、恚(いか)う言(い)出(で)されようとも思(おも)つて居(ゐ)ませんでした。余(あま)り長(なが)い事(こと)胸(むね)に疊(た)ま(ま)つて居(ゐ)たもんですから、ついでに堪(こら)へられないで口(くち)に出(で)して了(し)ました。貴(き)方(かた)、恚(いか)うなると愚(おろ)くに返(かへ)つてねえ、何(なに)だかわくわくするばかりで、思(おも)ふ事(こと)の十(じゅう)分(ぶん)一(いっ)も全(まる)で言(い)へませぬ。笑(わ)つて下(くだ)さい。これで二十六(じゅうろくにん)です。おまけに相(あ)應(おう)に塩(しほ)も踏(ふ)んで來(き)たのぢやありませんか、何(なに)だか焦(こ)れ(じ)れ(じ)つたくて癩(か)癩(か)が起(お)つて來(き)さうですわ。」

「だがね、其(そ)方(かた)(そちら)ぢやまア然(さ)うでもあらうがね、聞(き)く身(み)の此(こ)方(かた)(こつち)ぢやア全(まる)で初(は)耳(みみ)だからね、いきなり然(さ)う無(な)暗(あん)に浴(ゆ)せ掛(か)けられちやア、面(めん)喰(く)ふばかりで全(まる)で始(は)末(まつ)が付(つ)かないさ。考(かん)へなくつても知(し)れて居(ゐ)る。全(まる)で此(こ)方(かた)の氣(き)も知(し)らないで、だしぬけに那(そ)んな(そんな)事(こと)を言(い)出すのは、余(あま)り醉(すい)興(きやう)が強(きやう)過ぎるぢやないか。」

お今は其(そ)儘(まま)にぢつと見たが、

「あゝ、貴方は私がほんの浮気で這麼(こんな)事を言ツて居ると思ツていらツしやるのですね。」

「よしんば、然うでないにした処がさ。」

「そんなら最う少し身を入れて下さるだらうに、いくら這麼(こんな)身だからと言ツて、貴方も又余りですわ。」

「まア何方(どちら)にしるさ、てんで本当にはされないぢやないかね。」

「いゝえ、そりや御無理とは言ひませんよ。何うせそれは然うでせうけれど、些少(ちつと)は、些少だけでも此方の氣が知れさうなもんだのに、矢張(やツぱ)り思ひやうが足りないのかしら。」

「むゝ、仰有る事は大分殊勝だがね。」

「貴方、何うしたら可(よ)ござんせう。」

「然うさ。まアいゝ加減に笑ツて了ふのだね。」

「まア、何故然うでせう。最う浮かれてお談話(はなし)をしては居ない積りですが、まさか底に工(たく)みでもあるやうにはお取りなさいませう。」

「なに、那樣(そんな)事より、実は頭から全(まる)で解らないのだよ。」

「ですから、最初から今初まつた事ぢやないと言ツたではありませんか。それでなくて這麼(こんな)事が、なんぼ何でも遇ツたばかりで言はれるもんですか。何の、出来心なら貴方、這麼餘計な氣を揉まないでも、何処にでも好きな者が選取(よりど)りのやうに転がツて居ようではありませんか。為ようと思ツたら那樣(そんな)事に不自由をする身ではありません。」

「勿論然うさ。言ふがものはない。何も物好きに、這麼(こんな)処へお鉢を廻して来るには当らないと思ふ。何か以前からとかお言ひだツたが、これと取留めた談話(はなし)すらした事のない私に、何うの慙うのといふそれからして解らないぢやないかね。」

「それですよ、今から言ふと可笑しいやうですがね、最初お面識(ちかづき)になツた時から、貴方は最う人の物、手を出す事も出来はしませんでしたし、羨ましいとは思ツても、那樣(そんな)方の氣は出もしませんでした。忘れもしません彼(あ)の房ちゃんの亡くなツた晩私も見舞ひに行合はして居ましたが、彼(あ)の時貴方が枕元で、臨終(いまは)の房ちゃんに仰有ツたお言葉を聞いてからの事なんです。あゝ、思合ツたとは言ひながら、慙うまで真実の方があるものかと、涙が翻(こぼ)れるやうに真から身に染(し)みましたが、あれから以来自分でも何うかしたのかと思ふやうに、貴方の事を思はない日はなかつたのです。それは最う本当に自分でも抑へきれないで居たのですが、場合が場合で、それに未だ十六になツたばかりのずぶ子供で居た時なんでせう、一人で氣ばかり揉んで居る中(うち)に、貴方は最う遠くなツてお了ひなさる、私は濱の方へ行ツて了ふやうな事になツて、それから先は、自分で自由にならない身で、彼

方(あつち)へ縛られ、此方へ縛られて、到頭今までお目に掛れなかつたのも、覚えが無いと仰有るのも御至当(ごもつとも)で、此方には又、無理にも強く出られない引け身があるのですから、本当に何うしたらば、此事が、貴方のお肚(なか)に入るやうに出来るだらうかと、実は先刻(さつき)からそればかりに気を尽して居るのです。」

「むゝ、まアそれにした処がさ、大抵最う黴(かび)が生えるまで、一途に那樣(そんな)事を思ツて居る柄でもなからうぢやないか。知らないで言ふのも不躰だが、それからこれまでには、那樣事よりはもつと実(み)のある面白い達人(たてい)れが何(ど)の位あつたか知れないと思ふがね。」

「はア、それは最う何も隠すには当らないから申しますが、随分浮気も仕尽しましたから、思ツたよりは種々(いろいろ)な目にも遇ひました。けれども其度(たんび)に思出されるのは貴方の事ばかり、貴方だつたら恚(い)うぢやあるまい、あゝ、這麼(こんな)に焦躁(あせ)りながら何故恚(か)う貴方に遠くばかりなツて行く事だらうといつも思はない事はないのです。と恚(い)ういふと何だか、勝手な事を言ツて居るやうに聞えますが、あゝ何うしたら私の真の心を言ツて見る事が出来るでせうねえ。」

変ぢやないか。これまで類のないのにも随分出遇ツたが、未だ這麼(こんな)目に遇ツた事はない。冗談には応答(あしら)ツて居ながら、先刻(さつき)から見て居ると、何も飾ツて居ない確かな影が何処にも動いて居る。此処に至ツて稍(やゝ)退避(たじろ)がざるを得ないのだ。それとはなしに、

「そこで結局、何うしようと言ふのだね。」

「まア、何をお聞きなさるの。解ツて居るぢやありませんか。お察しなさいよ。」  
と言ツて不意と見て、

「ですが然う言ツたら、嘸(さぞ)厚顔(あつか)ましいやうにお思ひなさるでせうね。」

「はゝゝ、酷(ひど)く又其方(そのほう)を遠慮するぢやないかね。なアに、今更那樣(そんな)事を洗立てした処が仕様があるものか。」

「あら、本当に。」

「だが返事には少し狼狽(まごつ)くよ。」

「だからさ、察して下さいと言ふのですわね。」

「まアさ、それにしてもさ、些少(ちつと)は此方(こつち)の了簡も見据ゑるが可(い)いぢやないか。何しろ些少(ちつと)向不見(むかうみず)だぜ。第一那樣(そんな)事を言出すには、相手の氣心を最う少し知ツてからにするが可(い)ぢやないか。私が今甚麼(どんな)に変ツて居るか知りもしないで、那樣(そんな)安價(やすね)で思切ツて卸(おろ)して了ツて飛んだ器量を下げたら何うするのだ。」

「いゝえ、それは外の人になら、何で這麼(こんな)事を言ふものですか。貴方にだからこそ何も最う考へないで言ふのですわ。それは私のやうな這麼者ですけど、誰にもこれまで、此方から手を下げた事はありはしません。思込んだ弱身といふものは這麼ものだらうかと、自分ながら口惜しくもなる位ですもの。いゝえ、正味を言ひますがね、余(あんま)り此方の気を汲んで下さらないと、実の処腹が立つやうな気にもなるのですわ。いゝ加減最う目は見えないんですからねえ。」

「なに、此方だつて浮気で行くなら文句はないのだ。二つ返事でお辞儀は不躰、御意(ぎよい)は好(よ)しさ、何の事はありやしないがね、最う那樣(そんな)上づつた方は、今ぢや全(まる)で気がなくなつて居るからね、一寸融通がむづかしいのさね。なんなら異見の一つも様子によつちやア言ひたい位に、疾(と)うから質実(ぢみ)になり切つて居るのだからねえ。」

「それこそ猶更ですわ、私の願ふのも最う、那樣(そんな)空ツ調子で行かれる事ぢやないんですもの。」

「ふむ、それも一つ聞いて置かう。」

「はア、聞いて戴きませう。ですが貴方、私がねえ、若(も)しか願ひが叶つたら、此先何うするとまア思ツていらつしやるの。」

「解るものかね、それが解る位なら、這麼(こんな)餘計な口を利いて居るものかね。」

「おほゝゝ、まア、それから先へ言ふのでしたわね。」

「はゝゝ、何だか独りで了解(のみこ)んで居るぜ。性が知れないだけに気味が悪いね。併し兎も角地道に聞かう。で何うするといふのだね。」

「聞いて下さい、私はね、假令(たとひ)此思ひが此儘届いたからと言ツて、全(まる)で其上の慾は何も有りはしないのです。貴方も勿論最うお一人の身ではお有んなさるまいし、外にお楽しみの方(かた)もないとは思ツて居もしません。其中(そのなか)へまア割込んで、無理な願ひを押付けにするのですもの、それも這麼(こんな)身でなかつたなら、何とか取りやうもあるでせうけれど、今更何が言はれませう。貴方、此場になつて這麼事を言つたら何う又お思ひなさるかは知りませんが、私はこれまでに、それこそ数ばかりは掛けましたが、真から思込んで慥(か)うと言ツたのは、遂に一度ありはしないのです。貴方の事を思出すのも只それなので、いつでもねえ、たゞの一日でもいゝから、何うかして貴方のやうな方に一言(ひとこと)優しい事を言はれて見たいと、それなので、今の願ひも只それなのです、同棲(いつしよ)にならうの、一人占めにしようのと、那樣(そんな)大それた事を何思ひますものか。様子が何(ど)うの気前が何うのと、那樣事も最う通過ぎた昔で、只最う今迄一度も受けた事のない人の真実を、一度は身に受けて見たいばかりなのです。あゝ何だか理に落ちて、

お聞きなされるのも厭におなりでせう。自分ながらも愚癡(ぐち)ツぽくなつて、言ふ事が皆(みんな)これですもの。平素(ふだん)は這麼(こんな)私でもないのですが、何うしたのでせう、何を言ツて居るのか解らないやうな事がありますわ。」

「ぞつと其儘に眼を着けて居た僕は、其時思はず知らず、  
「最う可い。何も能く解ツた。それほどまでに思ツて居てくれたとは、聞くまで全く知らなかつたよ。併し此私が那樣(そんな)に思込んで居るほどの者だか、何うだか、請合ふ事が少しむづかしい談話(はなし)だ。」

「いゝえそれは最う、何と仰有ツたツて聞くのぢやありません。それでなくツて誰が貴方、下谷(したや)の時から今迄も思續けて居られるものですか。」

「用心おし、間違ふぜ。」

「えゝ、那樣(そんな)事なら何とでも仰有いまし。あゝ併しまアこれだけ言ツたので安心しました。百分一(ひやくぶいち)でも私の心が通じたと思へば、最う昨日とは、心持が違ひますからね。さア最う一ツきり息を抜きませう。貴方、お一つ。」

と小盃(こさかづき)、銚子を取りながら、

「貴方も併しお変りなすツたのねえ。此頃彼(あ)の土地へは」

「最う一向(いつかう)さ。なに彼處(あすこ)ばかりぢやない。然ういふ方はとんと知らずに居る。」

「何ですな。御卑怯な、お隠しなされるだけ罪が深いわ。」

「はゝゝ、それ処か。此頃は後生願(ごしやうねが)ひだ。だから今の談話(はなし)だツて内々珠数を繰ツて聞いて居た位だ。」

「おほゝゝゝ、那樣(そんな)珠数なら、いつでも切ツて見せますわ。」

「や、恐ろしい。まア精々お手柔かに願はうよ。」

「呆れますね。那樣(そんな)風ぢやア、全(まる)で本当の事は仰有いますまいね。」

「何をさ。」

「お佯惚(とぼ)けなされるな。それだから先刻(さつき)も、人が一生懸命になツて居る傍から、那麼(そんな)事ばかり言ツていらしツたのだわ、憎らしい。」

「はゝゝ、那樣(そんな)に気が付いて居るのなら、彼(あ)の時何とか言ツて教へてくれるが可い。此方(こつち)は何も知らないから、まごつきながら間の抜けた返事ばかりして居たのだ。」

「仰有いよ。本当に人の悪い。」

「はゝゝ、這麼(こんな)事ばかり言ツて居れば罪はないが、何しろ今日は思ひも付かない事で、何だか慙う昔の夢を見て居るやうな気持がする。全くね、何処で誰に遇ふか解らないもんだね。」

「其上飛んでもない事を言はれたんですもの。ですが、偶(たま)には這麼(こんな)目にもお遇ひなさるのが可いのですよ。平素(ふだん)の罪滅(つみほろぼ)しにね。」

「はゝゝ、這麼(こんな)罪滅しならいくらあつても可いね。」

「おほゝゝ、宜しければいくらでも持合はして居ますから。」

「では腹一杯にまア頂戴して見ようか。意地の汚い処で。」

「那樣(そんな)事を仰有ると又持出しますよ。今度は最う、はぐらかしだけぢや聞きやアしませんから、其積りで些少(ちつと)は御用心をしてお置きなさいまし。」

「や、又続け打ちか、今度は最う討死だ。」

「巧い事を。何うして手に負へるもんですか。間際へ行ツたら、又逃げられるは決ツて居ますわ。」

「なに、いつまでも那樣(そんな)逃げを張ツて置られるものか。第一其方様(そちらさま)が承知が出来まいと思ふがね。」

「あれ、私が最う、何う悶(もが)いたツて仕様がありますものか。残ツて居るのは貴方の御挨拶だけぢやありませんか。」

「むゝ、それぢや若(も)し、聞かなかつたとしたら何うするね、綺麗に笑ツて了ツてくれるかね。」

「まア、貴方は那樣(そんな)に訳なしに見ていらツしやるの。聞かれなかつたらそれまでで引下れるやうな、那樣(そんな)根の浅いのぢやないのですよ。貴方、口でかう言ひますけれど、恚うまで十年越し思続けて、何う思切る事が出来ませうか。勝手なやうですが、察して下さいましと、言ツたのはそれなんです。」

「むゝ、併しこればかりは無理押し付けに出来る事ぢやない。何うでも又聞かれなかつた暁には……。」

「えゝツ、そ、そんなら貴方は……。」

「なにさ、なにさ、此方(こつち)は未だ、何とも挨拶をしたのぢやないぢやないか。其暁は何うすると聞いて居るのだ。」

「まア、那樣(そんな)事を聞いて何うなさるんです。」

「可いから考へだけを聞かして貰ひたい。さア何うする其時は。」

「なに、然うすりや此儘で。」

と無理に微笑むと見せて、沈んだ影を眼縁(まぶち)に隠したが、

「死ぬまで片思ひで居るばかりですわね。」

「むゝ。」

と僕は稍(やゝ)行詰ツた形で、思はず目を下にした。途端に耳を打ツて、さながら思入ツた声音(こわね)に、

「あゝ貴方、本当に最う、何処まで人をお虐(いぢ)めなさるの。」

時の拍子であつたか何か知らぬが、僕は此時、言ふ事の出来ぬ心地を覚えた。敢て其悽婉(せいえん)の目眦(まなじり)が、例の蘭燈(らんとう)の下(もと)に恐ろしい力を持つ那樣(そんな)方(ほう)の肌合(はだあひ)のものぢやない。顔を見合せたが、最う冗談口も利かれない気になると、調子も妙に変つて、

「可(よ)し、お前の心持は十分に腹へ入つた。さアそれぢや、本気になつて些少(ちつと)話合はう。」

「えッ、本当。」

と声に迫つて、躍立つ氣勢(けはひ)に、お今は眼を輝かしたが、何を言ふかと思ふと不意に、

「貴方、今日は最(も)うお歸し申しませんよ。」

\* \* \*

事情が通じまいと思ふから、有りの儘を君に話したのだ。去年の春の事だがね、其処で些少(ちと)妙だが、久し振で上京して来た君に改めて僕の妻(さい)を紹介する。此室(ここ)へ連れて来るが、君今言つた女がそれだよ。

待ちたまへ。恐らく僕も娶(めと)る筈で居た、桐原家の令嬢の事を君は必ず何とか言ふだらう。地位と言ひ、才藝と言ひ、殊に品性の上に何の缺點もない彼(あ)の人を捨てゝ、何で物好きに這麼(こんな)古物(ふるもの)を拾つたのか。兎に角にまア見てくれたまへ。

指には絲道が着いて居るだらう。首に枕胼胝(くるまだこ)もあるだらうがね、談話(はなし)で想像したやうな女だか何うだか、見ての上で聞かうぢやないか。なに、馬鹿な、何処(どこ)に酔興で嘯(かかあ)を呼ぶ奴があるものか。

(明治三十九年二月)